

巻頭言

COVID2019と安全の認識

青山学院大学 名誉教授
林 光一



これまでの経過（6月10日現在）からもお分かりのように、今回のCOVID2019の世界的なウイルスの広がりには世界のどの国も予想をはるかに超えたものである。国という単位が関係すると、どの場合にも複雑な対応が必要となるのだが、安全という究極な状況になった場合は、この複雑な対応はある意味シンプルなものとなる。それでも、今回のように予想を超える状況になると、それ相応の手段が必要だということは言うまでもない。状況によっては、手段を選ばないということにもなる。

福島原発の事故の場合は、以前にもこの場で述べさせて頂いたが、想定外で、どうすることもできないという結果になって被害がさらに大きくなり、二次災害に対する対応を十分に考えなければならないと述べた。

COVID2019の対応策は、感染を減らすということと、経済破綻を起こさないという二つの問題を同時に解決しようと、政治の問題も含め、国によってゴールに向かう方法が違うことが良く分かる。筆者は、まず感染を抑え込むという方法が経済破綻の問題も最小限に抑えられるのではと考えるが、我々にとって初めてのことで、各国で様々な攻め方が行われているのが現状である。

ここまでのCOVID2019の戦いから学べることは、想定外のこのような戦いに対してどのように戦い抜けるかという事である。少なくとも、このようなことはそうそう起こらないので、多くを学べる。今回は、時間がかかりそうな内容であるが、このような何世紀に1回あるかどうかのパンデミックも、想定外という捉え方でなく、どのような状況でも安全対策を十分議論して、備えなくてはいけないであろう。つまり、早く抑えれば次の経済の問題に早く進めるわけである。もちろんグローバルということで、他国との関係が複雑にからむが。

最近のこのような戦いの良い例として、フランス・パリのノートルダム大聖堂の火災のドキュメントをテレビで見たが、多くの貴重な品々が消失したにも関わらず、死者が出なかったのは、消火の采配が素晴らしかったことと、現場で国のトップが現場のトップ（カザフスタンの戦場での隊長だった）と重要な判断をしていたことが驚くべきことだった。どの国でも、このような火災はその大小にかかわらずその現場は戦場で、正しい瞬時の判断とその実行が必要である。このような判断と実行は、日々培われなければならないが、非常に難しいであろう。

さて本題に戻ると、前回の私の話であった二次災害を十分考えるべきだということが、消防の場合（原発などの問題も含めて）は、COVID2019の場合と違って、時間が非常に短時間だということである。つまり、COVID2019の場合よりは即断即決がさらに求められる。しかも、次に何が起こり、何をすべきかを瞬時に予想しなければならない。このために、常日頃どのようになるのかをシミュレートして、いくつかの可能性を議論し、状況に応じた解決策を用意しておかなければならない。想定外を含めて。そして、これらの結果を上からの消防士までしっかりと理解しておく必要がある。その上で、しっかり状況を把握して指揮ができる人と勇敢な人達、そして国レベルの判断をする人が、できれば現地で指示をするわけである。現地には、当然専門家がいる必要がある。

種々の安全対策は、十分考えて議論しすぎることはない。これからのさらなる安全対策に対する意識改革と行動に期待したい。